
荀公達の憂鬱～真・恋姫†無双

夏蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荀公達の憂鬱〜真・恋姫†無双

【Nコード】

N8348Z

【作者名】

夏蘭

【あらすじ】

30代の元オタク青年は、日々の息苦しさを感じながらも、いわゆる真面目な生活の果てに、妻子を庇い交通事故で死亡する。

開放感と偏愛する妻との別れの淋しさに戸惑う彼を、『外史』というゲーム発の肥大した概念が取り込み、彼は、荀攸、字を公達として、かの三国志のパラレルワールドへと飲み込まれていく。

真っ白な世界で真っ白な漢女で（前書き）

よくある転生ものですね。軽い気持ちでお読み頂けると嬉しいかな。

真っ白な世界で真っ白な漢女で

「ふむ…ダーリンに比べるとパツとしないオノコよのう」

車に刎ねられ、薄れゆく意識の中で、

妻子が助かったのを辛うじて見届けたすぐ後に、自らの生を終えたはずの俺が。

なぜ、今、目が覚めたような感覚を持っているのか。

まして、瞳を開いていなくとも分かる、この特徴的な話し方。

野太い声の癖に、しっかりシナだけは作っているから、余計に気味が悪い。

…これ、間違いじゃなければ、師匠っぽい声のあの漢女だよなあ。

あー、子供が産まれる前はいわゆるオタクだったから、判るんだよ。いわゆる18禁って奴にも普通に手を出していたし、

三国志とか信長とか、ああいうスルメゲーも大好きだ。流石に遊ぶ時間は減ってたけどな…子供が産まれたら、育児放棄でもせん限りは自然とそうなってくる。

が、今はそれが問題じゃない。

薄目を開ければ、邪馬台国にいるような白髪の男。見事な髭。燕尾服に海パン。

うん、立派な変態だ。じゃない、ビンゴだ。

死後の世界がこんなのってアリかよ。

「しかし、ダーリンとは違い、大人の男性の色香もまた…」

うわあ、頬を染めるな。くねくねするな。

…ゆっくり永遠の眠りにつけると思ってたけど、そうもいかないか。

「ずいぶんといい趣味をお持ちのようで」

「むむっ!？」

事故にあったはずの俺の身体は、激痛の欠片も感じていない。

現世で万が一、生き残ったとすれば、呻くことすらままならないはず。

あえて、一気に上半身を引き起こす。

警戒したんだろう、二歩ほど引いてくれた。…精神衛生上、ほんとに助かった。

「うわあ、傷一つないぞ…おまけに、真っ白な世界に目の前に漢女
つて、

新しい地獄が始まったとしか思えん」

死んだ、って自覚がある。だから、妙に冷めてるし、取り乱すこともない。

夫として、父として、最低の義理は果たせて死ねた。人としては真
つ当な理由で逝けた。

そりゃ、もうちょっと生きていたかった思いも無いわけじゃない。
ただ、自堕落に生きて、のたれ死ぬことを肯定していた時期から、
妻に出会ったおかげで更生はしたけど、正直、全うな生き方がどこ
か息苦しくて仕方なくて、

それでも、投げ捨てられる程には情を捨てられず。

一粒種の息子についても、父親の役割はやってるものの、妻のように無心の愛情は持てず、どこか義務感に縛られていて。突っ込んで言えば、妻の非難を恐れたから。妻に軽蔑されるのを恐れたから。

妻への依存を自覚する自分が、子供を愛しきれないことを妻に問題視されるのが怖くて。

必死に愛するふりを続けた。

いつか本物になればいいと思いながら、そういう変化すら感じず。三年近くがあつという間に過ぎていた。

こうやって文章にして考えると、俺もいい感じに歪んでるな。

まあ、それはこの場では置いておくべきことで。

「なあ、あんた。俺は死んだんだろ。俺の妻と子は無事だったか分かるか？」

「むう。亡くなった者は通常、もっと慌てたり取り乱すものなのだが。」

「だが、まずは問いに答えよう。安心せよ、お主の妻と子は無事じゃ」

「…そうか。死んだ甲斐があるってもんだな」

「他人事のような言い方だのう」

「極論を言えば、妻さえ無事ならそれでいいんだ。それに付随する者もついでに守っただけの話で。とにかく…教えてくれてありがとな。」

嘘を言ってる様子もないし、こういう問いの答えを偽る性格でも無さそうだ」

俺の言葉に反応した卑弥呼（？）の困惑顔って奴は設定に無かった気がするが、

これはこれで貴重なものを見た。

さて、どうせ死んでるんだし、魂とか消される前に、聞きたいことは聞いてみるかな。

やっぱり、転生なんですか？（前書き）

さて、外史に落とすところまではサクサクいきましょう。

やっぱり、転生なんですか？

「ところで、外史の管理者たる貴方が、
なんで交通事故で亡くなった冴えない中年前の男の所に現れたのか。
早速理由を聞かせてもらえませんか？

大した理由が無ければ飽きるほど泥のように寝たいんですが」

とある病気で、殆ど自主的な寝たきり状態にもなったことがあるが、
あの感覚に似てる。

それに、早く意識を飛ばさないと、色々まずい。思いを馳せたら、
もうヤバイ。

「既に儂のことも知っておるとは。貂蟬め、何を考えておる……」

一番最悪なのが外史に飛んでくれうんぬん……って奴だ。

あの一刀くんみたく主人公補正もなく、現代で武道の有段者だった……
なんてこともない俺が、あの世界なんざ行っても殺される。

恋姫たちはモニターの中だから愛らしいのだ。

実際に相対したりしたら、ただのモブである俺なぞ一捻りで首チョ
ンパか、

謀殺されて、どこかの路地裏でぽいっちょであるのが関の山である
う。

「ハッキリ言うオノコよのう」

あれ、口に出てたか。まあ、そんなわけで行きたくはないのですよ。
それこそ、なんかのチート……いわゆる反則能力とか、

種馬君のような、一撃必殺の笑顔であるとか。

そんなものがあって、やっと舞台に立てる程度のもんでしょし。

「だがのう、既にお主はこの狭間に呼ばれてしまっておる。
正史の時間の流れから逸脱した存在になっておるのは、お主も自覚
しておるのではないか？」

「…嫌だ、と言ったら」

「儂らが適切に外史に送り込まずに、放置された迷い人は、永遠に
この狭間を彷徨うことになる。
この何もない真っ白な世界に、一人。儂らも迷い人になれば、見つ
けることは困難になるう」

うわあ、気が狂ってそのままバッドエンドですか。
拒否権無いじゃないですか、やだ！。

「現実逃避は良くないと思うがな。まして、儂の姿を見ても慌てる
素振りも無いのだし、
流れも薄々予想できていように」

…ああ、こんちくしょう。
自分勝手にやるからな！ やつと解放されたんだ、まともな生き方
なんか真っ平だ。
引きこもり生活実践してやるからな！

「お主を外史に誘導するように指示した者からは、特に何も言われ
ておらぬからな。
ただ、お主の向こうでの生まれなどは決まっておる。
そろそろ時間が無いので、駆け足で説明するぞ」

説明の内容をまとめると。

この場所は、外史の狭間。

一刀君がしょっちゅう出入りしては記憶消されて、送り出される場所。…悲劇やな。

管理人の卑弥呼さんの自己紹介。ようするに予測通りですよっと。

外史の想念って奴は実際存在していて、例の会社がたまたま近い概念でゲーム化したから、

より明確に実体化し易くなっているし、正史から人が招かれる下地も整いやすくなっていること。

…まあ、無差別に、ってわけじゃない、ってことだが、はた迷惑なことこの上ない。

もう、10代の英雄の存在に心のどこかで憧れる時期なんぞ、とつくの昔の話だ。

んで、俺は荀攸、字を公達として、あの外史に降る。

…明らかに霸王様に近い位置じゃないですか。引きこもり不可っぽくね？

まあ、頑張って阿斗ちゃんっぽく生きるだけださー。

荀家って時点で、ニート生活無理っぽくないか…司馬家なら大丈夫だったのに！

赤ん坊スタートだけど、記憶がハッキリするのは物心ついた頃からってことだが、

うわあ、いろいろ嫌すぎる…猫耳軍師の幼少期と関わるなんて勘弁し…。

「では、行くぞ！」

「どわあああああああ！！！！」

回想途中で、俺は時空の渦に飲み込まれ、強引に意識を失うことになるのだった。

「貂蟬…『ご主人様』の為とはいえ、

外史の始端と終端の存在以外に、

修正力を背負わせることなど…本当にできているのか？

確かにあ奴は自身の存在が消えることに無頓着な所があるようだが、だからとはいえ…まして、あのような異端の力をどう使っと…」

白の漢女の独白なんか、俺に聞こえるはずがないのだった。

やっぱり、転生なんですか？（後書き）

さて、引きこもり生活の実践は出来るのか？

荀公達として絶賛引きこもりたい（前書き）

桂花の親はかくあるべき。

当時の儒家思想を考えると、流石にどうなんだって設定があります。それゆえの恋姫無双を題材にした二次創作ではありますが、気に触る方は閲覧を控えて頂けると幸いです。

荀公達として絶賛引きこもりたい

ういす、とある外史の荀公達です。

あ、外史であつても、三国時代は『名』が真名並みに、公式の場では、場合によつてそれ以上に重要視されているから、うっかり『荀攸』さんなんて言つたら、即村八分だから注意な。下手したら即斬られても仕方ない。これ豆知識。

大体、満三歳ぐらいで大凡の記憶をしつかり認識したんだけど、そんな時にはこの外史の両親が既に亡くなつていたという…。

完全に以前の記憶を認識しつつ、荀公達として立ち回るようになった頃には、

俺は荀昆さんという親戚の家に引き取られていた。

字は教えてもらえてないんだよな…。理由は後で説明するんだが。

（作者注：正しくは『昆』の文字には糸偏が付きますが、常用外漢字の為此の表記を使います）

覚えていないから悲しがるも何も無いんだが、まあ、儒家思想つてのが強いこの時代。

遅いかもしれないけど、物心がついた今から三年間は喪に服す、なんて言つたら、

なんて孝行者なんだろう、つてことで、絶賛引きこもりが許された。やったね！

流石に食事を含めた身の回りの世話やら、屋敷の中で引きこもるに困らぬ竹簡やら、

この時代では貴重な紙で出来た書籍の山であるとか、

そういう手配はしてくれたから、退屈することもなく。

この世界の常識とか、文字とか、学問とか、知るには事欠かなかった。

元オタクの俺はゲームのみならず、

雑学とか知識を仕入れるのに楽しみを覚え没頭するタイプであったから、

『ばつちこーい』ってなもんだったのだ。

食っちゃ寝しながら、好きな本を好きなだけ読んでいられる。

そんな本の虫となった俺に、荀昆さんもドンドン読み物を差し入れてくれる。

環境としては、本当に恵まれていると言えた。…言えるはずだ。

「夏蘭^{からん}は文若のいい先生になってくれそうね。母として花が高いわ」

「義母上…、私ではとても務まりませんよ」

「そうやって謙遜する夏蘭は可愛いわね。ふふ、銀花^{ぎんか}と呼びなさいな。」

他の目が無い時ぐらい…」

うん、変態（ドM百合）の親はやっぱ^{シヨタクン}り変態だったんだ…。

義父もすんげえ童顔だしさ、性徴が始まったら、私の側室になりましようね…とか、

こつちが分からないと思って、赤裸々な欲望丸出しなんです、ええ。

ただ、これで済南郡の太守業務を、

桂花が産まれるまで見事に統治していた優秀な文官であることは知られていて。

さすが、神君の娘『八龍』だと民達に絶大な人気を誇っていた。

桂花産まれたから、普通の母親になります、
とかなんて言って職を辞した時はかなり騒動になったとか。
ただ、辞めた本当の理由が、当時孤児となった俺の光源氏計画を発
動させる為、

というのは、俺や義父上しか与り知らぬことである。

俺の記憶を持っていない普通の公達くんがいる外史だったら、
たぶん世に出てくることはなかっただろう…。

あ、だから、原作の恋姫の世界で苟公達がいなかったのか。

…おっそろしい外史の暗部だな、おい。

字を教えてもらっていないのも、真名で呼ぶことを強要されている
から。

俺の真名を覚えてくれたのはこの人なんだが…ほんと、どんだけだ
よ！

必死に『義母上』と呼んで自衛を図る日々です。

二人きり…いや、母上の背中には桂花がいるんだが、

実質二人きりの時に義母上…銀花さんの名を呼んでしまえば、

俺の外史人生終了のお知らせが待っているのだ。

桂花が歪んだ理由…絶対、この人のせいだよ…。

荀公達として絶賛引きこも…りたい（後書き）

この親してあの娘あり…。

貞操の危機回避に身体を鍛えよう（前書き）

公達くんは身体を鍛えるようです。

貞操の危機回避に身体を鍛えよう

絶賛引きこもり期間継続中の俺だけど、欲望を隠そうとすらない銀花さんに対し、俺は子供の振りして、光源氏とか側室なんて判らない風を装いつつ、毎日にじり寄ってくる危機と戦っていた。

俺の髪に触れたり、俺を母親の抱擁とか言いつつ抱き締める時の銀花さんは、頬が判り易く紅潮していて、瞳もハッキリと潤んでいる残念っぷり。吐息も明らかに熱が籠っているし、耳元で艶のあるため息を付いたり、

『我慢しなくてもいいのよ、いつでも受け止めてあげるわ…』とか、露骨に誘惑してくる変態っぷり。

学を教わる時とか、誰か人目があれば完璧な淑女を演じきってみせるし、

隠遁したとはいえ、来訪するかつての仕事仲間にも惜しみなく知恵を貸すし、

旦那さん…義父との仲も変わらず良好なので、俺に感じてない時は、実に堂々たる荀家の長を務めているのだ。

普段は尊敬してるし、孤児の俺に並々ならぬ愛情を注いでくれるし、

感謝こそすれ、嫌う事はない。

今はあまりに非日常すぎて、妻に二度と会えない寂しさを思い出す時間も、

結果的に少なくなっているから、変に落ち込む時も少ない。

だから、俺は彼女を拒否はしないんだけど…。

「だって、夏蘭に完全に堕ちて、
貴方だけの雌豚になったら、貴方は私を軽蔑するでしょう？」

別の意味でも淑女過ぎるわっ！ 勝手に心の弦きを覗くなっ！
たかだか五・六歳のガキンちょにそんな言葉を使うなああああああ
ああ！

俺は間男なんかになる気は無いんだっ！

・・・ゼーはーゼーはー。

「ふふふ、興奮した夏蘭も可愛いわ…ほんと食べてしまいたい」

「ほんとに義母上、真っ当に生きて下さいよ…」。

桂花がもう少し大きくなつて、今の義母様の状態を理解すれば、
私は彼女に憎まれかねません」

「あら、夏蘭は親子ど…」

「望んでませんっ！ どうしてそんな発想になるんですか…」

この外史の女性に漏れず、銀花さんも細身の身体に恐ろしい筋力を
秘める。

子供の身体の俺ごときがいくら暴れようと、容赦なくロックされた
ままの状態で。

文官のこの人でこれだから、武官連中なんぞ想像もつかん。

うん、今も銀花さんの膝の上だよ。両腕にがっちり捕まってますと
も、ええ。

桂花に因んでなのか、母たる彼女は金木犀に似た、何ともいい匂い

がする。

ほんとはこの香りに安堵して眠ってみたいと思うこともあるが、さすがの俺も、このガキの年頃での腹上死フラグは全力で回避する。

翌日。

俺は義父の元に密かに足を運び、

鉄扇と今の背丈に合う模擬刀を用意してもらうようをお願いした。

義父は複雑な表情をしながら、一両日中に手配を終えてくれていた。

「銀花を受け入れてくれていいんだよ？」

彼女は狭量じゃないから、公達に溺れたとしても、

私への愛情はまた別にしっかり育むことが出来る女性だ」

いやいや、義父上。むしろそこは全力で止めて頂きたいのですが。

「だって、銀花は君の居室に通うようになって、また一段と綺麗になったもの。

桂花を産んだとはとても信じられないほどに。僕としても嬉しいんだけどなあ」

理解力ありすぎですううううううう！！！！

俺は部屋の中での素振りと、

読書時にも鉄扇を持ち、常に腕を鍛えるように心がける日々を始めるのだった…。

さすがに命の危機を感じると、前世でやったことのない鍛錬つて奴も、

自然に続くもんなんだよ…いや、必死さって大事なんだねハハハ…。

「夏蘭が筋肉むきむきになるなんて、私は許しませんよっ！」

「嫌いになりますよ、義母上」

「うわーん！ 夏蘭に嫌われちゃうつゝ！」

マジ泣きである。

20歳以上のはずなのに、

なんでこうも少女のように泣くのが似合うんですか、義母上…。

「大丈夫、最低限自分の身を守りたいと思うだけだから。

だから、安心して。『銀花』」

こんな時は真名呼びと頭を優しく撫で撫での連携攻撃と、対処方法が決まっている。

どうしても機嫌を損ねてしまった時に、真名を呼び捨てないと許さないと言われ、

それ以来、こんな感じで。

「え、えへへ…夏蘭が真名を呼んで、頭撫でてくれる…」

うん、確かに可愛いと思うんだけどさ。

外面が子供でも、俺の中身は立派な三十代のおっさんなわけさ。

保護欲も沸くつてもんなんだけど。

五・六歳の子供が大人の女性を、真名を呼び捨てながら、頭を撫で続ける情景って、

うん、ありえんわ…。

貞操の危機回避に身体を鍛えよう（後書き）

人間追い詰められると、今まで出来もしなかった事が、急に出来る様になることがあります。

緩やかに日常は崩壊していく（前書き）

引きこもり生活にも陰りが見え始めます。

緩やかに日常は崩壊していく

喪が明けて、俺は八歳になりました。

叔父さんが酔った勢いで刃物を振り回し、桂花に当たりかけて、とつさに庇った結果、俺の耳が傷つくという事件もありました。史実通り、叔父さんには伏せるという話になったので、それを理由に引きこもり生活は無理やり続けています。

…といっても、邸宅から出ないだけの話で。

いや、荀家の邸宅は、現代の一般的な小学校ぐらいの広さがあるので、

運動するにも何も困らないのです。

中庭を走り回るだけで、十分な走り込みができるぐらいに。

少年期だからなのか、ある程度鍛えても筋肉隆々になることもなく、義母上も最近俺の行動を咎めずに、

「額から流れる夏蘭ちゃんの汗をペロペロしたいわ…」と、おっと…いつも通りだった。

過剰なスキンシップと思い込むようにしてから、既に三年余り。

発育も順調に進み、身長4寸（120cm）程度となり、さらに鍛錬の成果が始めて、

行き過ぎる行為には少しずつ抵抗も出来る様になってきているが、義母上はどこぞからか関節技を学んできて、

日々の戦いは一段高い極みに届こうとしている。…どうしてこんなった。

…俺の成長が嬉しいと言うのなら、諦めてくれるのが一番嬉しいん

ですがね、義母上。

こんな変態の義母上も対外的、突き詰めて言えば、俺以外には相も変わらず、

見事なまでに荀家の長を務め続け、

義父との間に新たな子供：荀甚^{じゅんしん}が産まれている。

正史では、荀或^{じゅんいく}の兄弟、袁紹の参謀になった人物だな。

まあ、夫婦仲は良好なわけだ。

「夫への愛と夏蘭への愛は別腹なのよ…！」

「うん、義母上。

そろそろ、文若もその意味がほんのりと判るとも限らないから自重して下さい」

「なによー。その辺りは夏蘭がちゃんと教えてくれればいいじゃないー」

二人の子供を産んだのに、

年頃の娘さんと変わらぬような体型、風貌を保ち続けているこの人は、

別の意味でも人外の域だと切に思う。

というか、俺の前では完全に精神年齢が子供に近いものに戻っているし。

日々のストレスを発散しつつ、俺から精気を巻き上げている錯覚すら覚える。

触れるだけで、道教で言う『氣』って循環するんだっけか？

「第一、桂花も貴方にべったりじゃない」

「兄として慕ってくれているようですね、ありがたいことだと思いますよ」

義母の真似をして、

桂花が俺に日中はほぼべったりくっついていてる状態になってからは一年ぐらいか。

影響受けるだろうなとは思っていたが、やっぱりな、という結末である。

懐かれるのは嬉しいものだし、俺からすると娘が出来たような感覚で、

愛らしく感じているのだが、さて、いつ頃彼女本来のツンが出るこ
とやら…。

「…ねえ、夏蘭」

「なんでしょう、義母上」

「以前から思っていたの。桂花は聡い子だけど、すごく気難しい所がある。

だけど、貴方は少なくともあの娘に慕われているし、既に真名も許された」

「…真名の本当の意味合いをまだ、文若は判っていないでしょう。だから、私も実際に呼びはしませんし、私も自分の真名を許していない。

その辺りは少しずつ、理解してくれればと思っています」

本人には、文若と呼ぶのが当たり前になっているから、と説明はしている。

ただ、彼女自身は納得はしていないし、今後の彼女の成長に合わせて、対応を一步間違えると、どこぞの種馬君みたく日々罵倒される立場になるのは想像に難くない。

「そう。その物言いもそうなのよね。」

貴方の前では、私は子供に戻る感があるし、それを自覚している。それを問題なく受け入れてくれる貴方を知っている。

：ただね、貴方はまだ八歳の少年。

五歳児の頃には、今の雰囲気や話し方が完成されていたわね。ただ、それはとても異常であるということを実感している？」

喪中とか、叔父さんに気取られないようにとか、色々理由をつけて、引きこもり万歳だったから、

基本会話を交わす相手も、義母上とか、本当に一部の人に限っていたこともあり、

全く子供っぽい振る舞いはせずにきたからなあ。

屋敷の使用人の人達でも、会話をしたことのある人自体が殆どいないこの事実。

まあ、いずれ問われるとは思っていたけど。屋敷を出て行くのは意外に早くなりそうだな。

ただ…泣きそうな声色で、問いかけるのは何故なのですか、義母上。

緩やかに日常は崩壊していく（後書き）

珍しく母親モードの荀昆さん。

荀甚、荀或は当て字です。
じゅんしん じゅんいく

機種依存文字になるから、文字化けしてしまう為ですね。

問答（前書き）

引きこもり生活とも徐々にお別れなのです。

問答

「桂花や友若のあやし方や、

おしめの世話にしても貴方は本当に手馴れたものだつた。

一度見て覚えたというけれど、あの手際の良さは異常に映る。

寝かしつけにしても、あの人よりも上手なもの」

「子供らしくなくてすいません」

「いいえ、詫びるべきは私であり、夫であるべき。

貴方はその年にありながら、立ち振る舞いや精神面は立派な成人であり、

時に老獪なものすら感じられる。

子供の背伸びなどでは決して無い、ある種完成されたものだわ。その包容力に、私達一家は甘えているに過ぎない」

「買い被りすぎです、義母上。

赤ん坊の泣き声に苛立ちを隠しきれない子供ですよ、私は」

「でも、その苛立ちを、貴方は桂花や友若にぶつけることは決して無い。

おくびにすら出さない。

赤ん坊はそういうものだ、貴方はしっかり飲み込んでいるからよ。

桂花の夜泣きで眠れぬ夜を過ごしていた私達を見かねて、

一日置きに離れにある貴方の居室にさも当然のように引き寄った貴方は、

あの時、私達の誰よりも親らしかった」

「軽率であつたと思います。子供の振る舞いとしては気持ちが悪すぎる」

罪滅ぼしの代償行為だつた。

前の世界で、息子に対して事務的な父親の接し方しかしてやれなかった。

二度目ならば、もう少しうまくやれるだろうと、

そんな俺自身の、自己満足の為の我がままだつた。

この世界で、義母上が過剰ながら惜しみなく与えてくれた愛情に、妻と会えぬ寂しさを強く感じずに過ごせた、せめてもの恩返しのもりだつた。

ただ、五・六歳の子供が乳児の世話を完全にしてのけるのは、明らかに異常であつたのだろう。

乳母に任せる選択肢ももちろん取れたはずだ。

可能な限り家族で育てたい、

そう願つた義母上の希望を勝手に掬い取つた、俺の身勝手であつた。

「いえ、私こそ本当にごめんなさい。私は、夏蘭に亡くなった父の影を見ているのよ。」

だから、必要以上に我侭になり、童心にも容易く帰ってしまう」

「それで、良いですよ。」

その代わりに、私の異質さを飲み込んでくれたのでしょうか？

…いつか、この家を出る前には、全てお話ししたいと思います。

それまでお待ち頂けませんか、銀花」

彼女の頭をなけなしの胸板とまだ短い両腕で包みながら、俺は静かに告げた。

もう少しだけ、この穏やかな日々を、続けていたい。それは偽りざ

ぬ本音であつたから。

「こんな時だけ、真名を呼ぶなんて、本当にズルい男性であること……まさかと思うけど、この年で貴方、こつそり女を誑かせたりしていないでしょうね？」

「無いですね。男として、子を成す事すらまだ出来ない未成熟な身体なのですし。」

仮にそういう欲も制御する術も心得ていますから」

「……夏蘭。本当の貴方は、一体何歳ぐらいなのかしら」

どうしようもない、悲しみの色は消えているように感じる。

率直な問い。秘密を共有したい、そんな希望といったところなのか。いつもの義母上の調子が少しだが戻ってきている。

「四十にまもなく手が届くといったところです。」

ただ、無意味で年だけを重ねても、大人には成り得ない、それぐらいは判っている、ということでしょうか」

「成る程、私が適わないわけね。」

……夏蘭、貴方が秘め事を明かしてくれる日を待っているわ」

この夜以降、義母上は私を外出時や、元部下の訪問が合った時などに、

従者の一人として、常時同行させることになる。

俺には、独立した後の為に、密やかに人脈を築かせる為。

義母上は、俺を密かな相談相手として。

そりゃ子供を相談相手にしようなんて、普通考えられないからなあ。

隠遁生活のお陰で、俺の事は荀家以外には知られておらず、
武経七書や五経、孟子や左伝などを読破して、義母上と政策論議に
興じていることなど、
世間様は知らない。

この時代の知識人を直に見て、自らの知識と知恵を精錬させつつ、
その知恵を披露して実践する機会を、義母上は作ってくれたのであ
る。

「ふふ〜ん♪ 私だけが夏蘭が神童たる存在であることを知ってい
る。

なんという甘美な秘密なのかしら…♪」

まあ、外出時も油断すると通常運転になるので、
その辺りの気疲れは増える事になったのだけど、それは別の話だろ
う。

問答（後書き）

銀花義母上の個人的な相談役ポジをやりつつ、この外史を見ていく
ことになりそうです。

さて、幼女なオーホッホとか霸王さまを描くのであろうか。
これじゃまるで幼女無双じゃないか・・・。

事件（前書き）

早めにヒロイン登場させてしまいました。

事件

「疲れた〜！ 夏蘭、肩揉んで〜」

義母上と俺は現在、本家を離れ、後漢の都でのお仕事を粛々と務めていた。

潁川太守代行に近い立場と権限を持って、洛陽での折衝を担当しているのだ。

……義母上はいつの間にまた官職に復帰していたんでしょうか。

俺の見聞と人脈は確かに広がりがりつつあり、義母上には感謝することしきりなのですが。

「はい、義母上」

「次は腰揉んで〜」

「はい、義母上」

「次は胸揉んで〜」

おいこら。流れのどさくさで何を言っただか。

「却下です、義母上」

「ぶ〜ぶ〜」。

ここは流れに乗って、私の慎ましい胸を大きくすることに協力するところでしょう？」

「……二人になった途端、本当に平常運転ですね。」

と言いますか、義母上。実は、気にしていらないんですか。確かに一般的には小さいかもしれませんが、大小問わない男性はいますからね。義父上のように」

紗耶に比べると小さいとは思いますが、それだけの話。

俺にとっては彼女が、女性の水準であり指標であり、かつ絶対的なものに過ぎない。

思い出す度に喉が、肌が、心が乾いていく。彼女がいない世界で俺は一体何を……。

「えいつ！」

ぽかつ。そんな可愛い音が俺の頭から鳴る。

義母上お手製の小型ハリセンが炸裂したのだ。

ん？ スパーン、じゃなくて、ぽかつ、てどういうことなの……？

「失礼なことを言った挙句、他の女の事考えてる」。

そんな情感の籠った目なんて、私には絶対向けてくれないもの！」

義母上の頭の上に、『ぶんぶんっ！』と吹き出しが浮かんで……いる！？

いや、幻覚だ、幻覚に決まっている。

さっきのハリセンの音といい、この義母上がいくら想像の斜め上を行くとはいえ、

そんな漫画のようなことがあるはずがないではないか！

夏蘭……貴方、折衝ごとの後で疲れているのよ……。

吹き出しが未だに見えて、おまけに『ぶんすかつ！』という言葉に

変わっているなど、

俺は決して認めてはならないっ！

「さて、戻った？」

「……はい、義母上。『いつも』ありがとうございます」

頻繁に絶望に覆われかける俺を、毎回こうして引き上げるのは、いつもこの人だった。

「じゃあ、腰の続きをお願い。

晩には袁家と曹家のご息女との会食が控えてるのよ」

へ？ そんな話は聞いてませんよ！？

「あゝ、気持ちいい。夏蘭は上手よねえ、按摩」

と、そこで義母上は一度言葉を切り、真面目な声色で話し出す。

「私と表に出る時点で、貴方の才が隠し切れないのは当たり前ですよ。」

従者の振りをしていても、見るべき者はしっかりと見ているわ」

いや、私は従者ですから。第一、交渉事の時に、俺は一切発言していませんじゃないですか。

「……荀家の懐刀、そんな識者達の評価がついているわ。

多分、私に知恵を出しているのが貴方と気づいているのでしょうかね」

その洞察眼の方がこええよ！

第一、俺の未来人たる視点の突拍子さをうまく噛み砕いて、この時代でも使える提案として仕上げているのは、義母上の才だというのに。

「で、早いうちから自分の家の娘に仕えさせたい、そんな意図なのではなくて？」

「よし、義母上。急用と称して、家にすぐ帰りましょう。今すぐ帰りましょう」

いくら幼いとはいえ、霸王様に会うのなんて真っ平である。おーっほっほですら嫌だというのに。

「……諦めなさい。既にお迎えが来たようよ？」

「仲和様、袁本初様と曹孟徳様からのお迎えが参られました」

侍女の声がかかるや否や、部屋の入口の扉が勢い良く開かれる。

「お邪魔しまーす。文醜、字を長鰲っす。姫の命令でお迎えに上がりましたー」

「あうう、文ちゃん……親しい友達を迎えに行くような感覚で……本当に申し訳ありません。

私は袁本初を使い、顔良、字を清臣と申します」

勢い良く部屋の中に入ってきたのが、真名が猪々子という、この世界での文醜。

小柄ながらも、勝気な瞳に淡い緑色の髪を見れば、彼女とハッキリわかる。

そして、ぺこぺこ頭を下げながら遅れて入ってきたのが、
真名を斗詩、この世界での顔良。

既に苦労人の雰囲気醸し出す彼女は、綺麗な黒髪を揺らしながら、
涙目ながらも、しっかりと挨拶をしながら頭を下げ続けていた。

さらに扉から続けて部屋に入ってくる少女がいる。

あの青髪が見えたということは……。

「失礼致します。私は夏侯淵、字を妙才。曹孟徳の使者として参りました。

ほら、姉者も入ってくれ」

「いや、私はいいよ……偉い人に会うのって苦手なんだよ……」

ピンゴでした。秋蘭さんだね。この世界の夏侯妙才。

が、あれ？　こういう時の春蘭さんは猪々子と同じ動きをするはず
なんだが……。

それに、なんだ。この声。俺の知っている春蘭の声じゃなくて。

「し、失礼しま……って、ひーちゃん！？　ひーちゃんだよね！？」

息が止まる。この呼び方で俺を呼ぶ女性はたった一人。

「幼い頃の写真のひーちゃんにそっくり！

鍛えてるのかな？　写真よりも凛々しく見える」

姿形は恋姫の春蘭の少女時代というべき風貌。

だが、やや幼いとはいえ……この声を、無邪気なこの仕草を、忘れ
ぬはずもない。

顔つきが違えど、彼女を誤認することなど有り得ない。

夢に見て、その度に目覚めて涙を流し、現実には壁を殴り続けては拳に血を滲ませ、

義母上や桂花に止められる毎日を伊達に八年以上送ってきたわけではない。

「紗耶……なのか……？」

「うん！ ひーちゃん、本当に会えたっ！」

飛び込んできた彼女を本能的に抱きしめる。理由とかはどうだっていい。

妻が、紗耶が俺の腕の中にいる。匂いまで一緒だ。

「会えた、ひーちゃんに会えたよお……」

未だ混乱する頭の中、俺はただただ最愛の妻を抱き締めるしか出来なかった。

銀花さんの喜びと悲しみが入り混じった視線や、

秋蘭さんたちの困惑した表情など気づくはずも無かったのだ……。

事件（後書き）

嫁さんを出すところまで一気に持っていました。

あとは依存ぶりをどう書くかですね……！

文ちゃんと苦労人さんの字は同じ姓の有名人付近から拝借させて頂いています。

諱で呼ぶのは真名同様にやばいとは思えないので…あばばばば。

盲目（前書き）

主人公の偏愛ぶりが一気に表面化します。

盲目

「紗耶の匂いだ……姿形は変わっていても、うん、間違いない……」

「うう、ひーちゃん。さ、さすがに恥ずかしいよ……」

それに、私、まともな自己紹介も出来ていないのに……」

「外野なんぞどうでもいい。邪魔する奴は全て潰せばいいんだ」

椅子に腰かけた自分の膝上に、紗耶を座らせ、

後ろから強く抱きしめることで、ピタリと密着して、

思い切り鼻をくんかくんかし、顔をこすりつけるように彼女の髪に埋める。

嗚呼……！　なんと心が潤い、満ち足りていくことが！

魂が叫ぶ。外見が春蘭であろうと、この女性は俺の妻、紗耶である
と。

八年あまり、恋い焦がれ続けた、俺の半身と言える……いや、半身である存在の紗耶を、
どんな形であれ再会出来た今、片時も離すつもりは無い。

しかし、夏侯惇か。二人きりで暮らすためには、曹操はやはり消すべきか？

この世界の曹操は夏侯姉妹が自分に絶対の忠誠を誓っていることを、疑いもしないだろうし、そうしない彼女たちを認めようともしないだろう。

今ならまだ六歳かそこらといったところか。消すなら今だな、くく

っ……。

「う、うわぁ……あたしが斗詩を愛でる時よりも激しい変態っぷりだぜ……。」

あたいでもここまで公然と出来るかどうか……っ!」

「こんなところで変態発言しないでよ、文ちゃん。

ところで、口元がすごく歪んでるし、とても悪い顔してるよぉ……。本当にこの人が噂に聞く荀公達さんなんでしょうか……」

「……わたしの、わたしのからんがあぁ……!」

「荀都尉!?　しっかりされよ、荀都尉!　気をお確かに!」

外野が煩いな。……消すか。

この世界だと社会的にではなくて、直接手を下しても構わんのだろう?

「か……らん?」

「!?!」

「く、くそっ」

「ひっ!?!」

何を貴様らは蛇に睨まれた蛙のような表情をしてる。俺と紗耶の間を邪魔したのはお前らだ。

「ひーちゃん、駄目だよ。相変わらず、私が絡むとすぐに変になる

んだから……。

ほら、皆固まっちゃってるよ?」

「む。紗耶との時間を邪魔する奴らは滅ぶべきだろ」

いや、消すつもりだったから、硬直してくれるのはむしろありがたいんだが。

顔良なんぞ失禁してるから、小便臭いし、止めを刺してやるのはむしろ優しさだ。

「久しぶりに出会えたからって、周りが見えなさ過ぎだよ。前の世界でもいつも周りの人が凍り付いていたのに、今は鍛えてるから余計に、どう見ても危ない人だよ……。」

でも、ひーちゃんってそうだったよね。

ふふっ、何十年ぶりの感覚だけど、安心しちゃう私もダメ人間だな。私の為に怒ってくれるひーちゃんが嬉しくてしょうがないよ」

「紗耶がダメ人間なら、他の奴らは塵じゃないか」

紗耶ほど優しい心を持つ奴など簡単にいるものか。

「あ、姉者、なぜこの狂気と殺気が濃厚な状況で、普通に話せるんだ……。」

華琳様とて、これ程の覇気は……」

「だま……」

「ひーちゃん、悪いけどちょっと黙っててね。なでなで」

紗耶に頭を撫でられ、制止されたからには仕方ない。

大人しく黙る。再び髪に鼻を埋め、ささくれ立った心を癒してもらう。

……紗耶はやっぱいい匂いだ。

殺してやると思っていた怒れる気持ちも、スッと解けていく。

「秋蘭、大丈夫？」

「な、なんとか……。ただ、顔清臣は気を失ったし、荀都尉に至っては完全に呆けてしまった。会食は延期するしかないか」

「それと、私はしばらく帰れないから、華琳様にうまく伝えてほしいな」

「な、なぜだ？」

「事情は後日説明するから。明日もこちらに来てくれると助かるよ。荀都尉は私とひーちゃん、じゃ分らないか……。ねえ、ひーちゃん。他の人にはどう呼んでもらったらいいの？」

「他の人に呼んでもらう必要はないよ」

他人なんざどうでもいいし、今はこの香りを堪能したいんだって。

「私は少なくともしばらくひーちゃんの傍を離れないし、ずっと離れない為にやることがあるでしょ？」

私は夏候惇になっているわけだし」

「むー」

面倒くさい。憂鬱になる。

「むー、じゃないでしょ。ほら、秋蘭も困り果ててるよ。私を今まで守ってきてくれた、この世界の家族だよ？」

「……確かにそれはいかん。俺に再会するまで紗耶を守ってくれた人には礼を尽くすべきだな。」

「これは失礼した、夏候妙才殿。ご挨拶が遅れて申し訳ない。

私は、荀攸。字を公達。真名を夏蘭と申します。

妻をずっと守り続けてくれたことを深く感謝致します。

私ごときで出来ることがあれば、何でも言いつけて下さいませ。

あ、但し、紗耶と離れるとか、紗耶絡みのことは受け付けませんので」

「しっかり挨拶するのはいいけど、私は膝の上のままなんだね、ひーちゃん。

らしいけど、あまりにかっこつかないよ？」

あ、秋蘭。『紗耶』っていうのは、私のことね。

後日まとめて説明するから、今はそういうものだと言ひ込んでおい
てね」

「わかった、姉者。ただ、公達殿……妻というのは」

「紗耶の言う通り、『そういうもの』です。

あ、紗耶と私を引きはがすようなことをすれば、
貴女たちのみならず末代まで呪い殺しますので、そのつもりで願
いしますよ」

ニツコリ営業用の笑顔を見せた俺に、
妙才殿は壊れた人形のように、首をかくかく縦に振るばかりだった。
理解頂けて何よりだなあ。

盲目（後書き）

こんな彼を当たり前のように入れる妻も、ある意味、ね。

虚勢（前書き）

ハツタリも大事なことであります。たぶん。

虚勢

「へえ、呪い殺すとは穏やかではないわね。

それに私の秋蘭を怖がらせるなんて、貴方こそ唯では済まなくてよ
？」

「！？……はっ、私は何を……」

「……なぜに貴女がこちらにおられるのですかね」

壊れた人形と化していた夏侯淵を人に戻した一声。

金髪ちびドS。未来の霸王。乱世の奸雄、曹孟徳だ。

一目見ればわかる。どうにも俺より年下のようなだが、既に立派な覇
気をお持ちのようで。

才やら内包する気が隠し切れないってどうなんだよ、ほんとに。

今ですら背筋に寒いものが走るほどであるから、

成人した状態の彼女に初めて会えば、俺も今の顔良の仲間入りにな
る可能性が高い。

しかし、文醜さんや。失禁斗詩は可愛いなあ、じゃなくて、

早く床やら彼女自身の後始末をしてあげるべきではないかな。

まあ、俺も紗耶を愛で続けているから、人のことは言えないだろう、
傍目には。

……世の常識など、紗耶の前ではどうでもいいんだが。

「あら、私のことを既に知っているのね。どうしてかしら？」

「先に問いかけたのはこちらです」

「ちょっと、ひーちゃ……」

紗耶は少しだけ黙っていてくれな。ほっぺたを左右からつまみ、少しばかり引つ張る。

「ひたいほ、ぴーちゃん」

涙目で訴える紗耶も変わらず愛らしい。思わず頬ずりしてしまう、全力で。

「……そんな風に、貴方が春蘭を愛でて、あっという間に半刻（一時間）が過ぎたからよ。

会食の時間などとつくに過ぎているわ」

「なん……だと……」

紗耶の愛らしさのあまりに、時空が歪んだというのか！？
俺の感覚ではまだ五分程度しか愛でていないというのに、
時の針は二十倍の速度で進んでいたとは……。

「心の声が全部口から出ているわよ？

しかし、私の春蘭に何をとも思っただけねど、

春蘭がこんなにも表情豊かにアタフタしたり、顔を真っ赤に染めたり、

愛らしい様子を見せるなんて、正直思わなかったわ」

「紗耶の愛らしさはとどまることを知らないので、まったくもって仕方がないな」

「同意したくないところだけど……春蘭が愛らしいというのは確か
ね」

「うむ、流石は人材コレクターの曹孟徳どのだな。見る目が違う」

「これくたあ？」

「遠い東にある異国の言葉で『集める者』という意味だ」

まあ、かなり未来の話だし、西から回った方が早いんだが、それは
些細な問題であろう。

「蓬萊国のことかしら」

「蓬萊よりもっともつと東だ」

「なぜ蓬萊より東に国があると言い切るのかしら。
伝聞や古い竹簡にも描かれていないというのに」

（些細な話だ。気にするな）

「煩い奴だなあ。だから大きくなれないんだ」

あれ？　なんか部屋の空気が一気に凍った？

「ひーちゃん！　心の声と表に出ている声が逆だよ！」

「カクゴハイイワネ？」

あ、やっべ。殺気を濃厚に含んだ覇気が部屋中を包んでら。
顔良なんか、可愛そうに。

覇気で意識が戻った瞬間、その覇気の大きさにまた失禁してしまっ
てるよ……。

それに、体格に合わせてあるとはいえ、あれは立派な大鎌の一種だ
な。

幼少時から自分の得物にしてたんだな、霸王様。

「些細な話だ。気にするな」

「今更遅いつ！」

明らかに子供が振るう速度を超越した速さで襲い来る大鎌の刃。

ただ、俺には余裕はそれほどないにせよ、模擬刀を構え、受け止め
るぐらいの時間はあった。

……片腕にはしっかりと、紗耶を抱き留めたまま。

ギンッ！

金属同士がぶつかり、火花を散らす。止められた刃に、霸王様は驚
愕の顔に彩られていた。

しかし、紗耶を抱き抱えているのに、巻き込んだらどうするんだよ、
このサドっ！

「ひーちゃん、華琳様はそんなドジはしないよ？」

と言いながら、紗耶は念のため、護身用の短刀を構えているし、

「そんなヘマなどしないわよっ、この性格破綻者っ！

私が大事な春蘭に傷をつけるわけがないでしょうがっ！」

容易く攻撃を止められたように見えただろう。お怒りの霸王様の罵倒を頂戴した。

噴火しかけた俺の狂気。

それを見越して、二人の発言があり、俺は爆発を逃れたわけだが。

「あれ、また出てた？」

「……公達殿、全て口に出ているよ」

呆れ果てた口調で、妙才殿が教えてくれた。いや、なんか申し訳ない。

「しかし、孟徳殿。速いが、意外と軽いんだ。だから、俺でも止められた」

「なっ……！」

「俺と似たようなもんなのかな。

外に出る殺気の大きさに比べて、力量がまだ追いついてないっつか。

体格はどうしても年を重ねるしかないし、筋力は長年の鍛練が物を言うだろうからな。

ただ、意志の力って奴は、子供であろうとも鍛えられるって証明でもある」

まるで、虚勢を張っているようにも見えるかもしれないが、そのハッターが効く相手には有効に使えばいいことだ。

「孫子曰く『戦わずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり』つてな。

戦わずして勝つが最上、虚勢だろうがなんだろうが、物は使いようだ。

……ま、孟徳殿の信念とは相容れにくいかもしれないが」

「私は本物の力を欲するわ。……ただ、その使い方を知る者が、私の裁量の元に、

虚実を交えた軍略を取ることで否定しようとは思わない」

それを認め、飲み込むのも上に立つ者の力量でしょう？ と、霸王様は艶やかに微笑む。

この年でこの笑みが出来るというのも、空恐ろしいもので。

虚勢（後書き）

華琳さまは自分で虚構の力を使うのは認められない。
だけど、配下の者が使うのまでは「基本」は止めない。
そんな印象を持っています。

泥水（前書き）

初見の人にはそう見えるのもやむを得ないのです。

主人公はプロントさんの影響を受けています。
某動画のプロント成宜さんが好き過ぎる。

泥水

孟徳殿の妖艶な笑みの後、それから四半刻程度か。

彼女と、紗耶（春蘭）の愛らしさを中心にして話を深めていると、あえて空気を読まない紗耶が、こう言ったのだ。上目使いで瞳をどこか潤ませながら。

「ひーちゃん、お腹空いた……」

「よし任せておけ！ 紗耶の潤んだ瞳の前では光の速さで作らざるを得ない」

そして、四半刻程度で出来上がったものが、お雑煮である。

米を研いで水につけて…などとやっている、時間がかかりすぎる為、

干し餅を使用して、簡易的な雑煮に仕立てたのだ。

「とりあえず、簡単なもので済まないけど」

「ふざけているの！？ 泥水のような色じゃないの！ せっかくのいい香りが台無しじゃない！」

はっはっは。孟徳さんの反応は予想通り過ぎる。

俺は紗耶さえ喜んでくれればいいのさ。他の人たちには食いたきや食え、である。

「これっ！ 味噌汁の雑煮だっ！ ありがとっ、ひーちゃんーっ！」

大喜びして抱きついてくれる紗耶。この反応に孟徳殿や、妙才殿は
啞然。

いやあ、そりゃそんな顔にもなるだろう。日本人で無ければなかなか分かるまいて。

「うんうん、ちゃんと昆布やかつおぶしで出汁も取ってあるからな。味噌作るのは本当に苦労したんだ……」

実は、こつちの世界に来てから、貂蟬が一度だけ俺に会いに来たことがあった。

外史の管理者たる、マツチヨな肉体にピンクのビキニパンツのみを着用した、

オカマの貂蟬であつたのは重ね重ね無念である。

声はドラゴンボールのセルそっくり。まあ、強力若本だから仕方ない。

え？ メタるなって？

いや、そもそもゲームの世界観そのままの『外史』にいる時点で、それは言わないお約束ってやつだ。

目的としては、俺という存在が外史に根付いたことの確認。

あとはいずれ判る隠し事があると言われたのだが、

『内緒よん』などと、しなを作りながら言われたので、詳しく問い質す気も起きなかったのだ。

で、困ってることはあるか、と聞かれた際に、元の世界の味が恋しいと言ったところ、

味噌や醤油などの作り方を授けてもらった。脳に焼き付けてくれた、という。

実際には、紗耶が恋しいと言ったが、召喚は無理だと言われたのだ。

……既にこつちに転生させてるとは、流石に言えなかったんだな、と今になって分かる。

召喚は無理、と貂蟬は言ったわけで、転生が無理とは言ってなかったからな。

隠し事にしても、中々粹なことをしてくれるものだ。

といっても、実際に作るのはとても大変だった。

味噌汁や醤油に恋い焦がれるぐらいの勢いでないと、正直何度諦めようと思ったことか。

材料の準備からして苦労したんだ。

一回に造る量……一つの容器で、大体6キロできるんだが、

この時代の単位で、大豆が六斤、麴が九斤、塩が三斤半……。

現代の量で言えば、それぞれ1・3キロ、2キロ、800グラム。

義母上の全面協力があつてこそだよ、本当。

この外史は酒がよく飲まれることもあり、

麴を手に入れるのに事欠かなかったのもありがたい話だったのだ。

「はっ！ この匂いは夏蘭の雑煮っ！ 私も食べるっ！」

「どうぞ。多めに作っておりますから」

おお、匂いで義母上も復活したよ。

最初は色に躊躇っていた義母上も程よい塩っ気を気に入ってくれたからか、

材料代は惜しみなく出してくれる。ありがたやありがたや。容器としてのいい木桶も見つかったからな。

なんでも、陳留周辺でしか出回らないという代物らしく、
気を利かせた義母上が十樽ほどを一気に手に入れてくれていた。

一年目は四苦八苦していた味噌作りも、
造り始めて三年目の今は、小桶も手に入れて、配合を変えたり、
麹造りそのものに取り組み始めている。

木灰を利用して、米かゆに発生するカビから、麹菌を少しずつ採取
する作業だ。

手探りで行っているだから、
実際に麹が造れるようになるのはかなり先のことになるだろう。

凝り性の気がある俺は、やり始めるといつもこんな感じで。
歴史とかにしてもそう。

三国時代末期の羅令則マジチート！……とか言っても、
ピンと来てくれる人が少なくて、悲しい思いをしたのも、懐かしい
思い出。

紗耶は歴史好きって観点で最初に気が合ったから、こういう濃い話
ができる存在だ。
さすが俺の嫁だよな！

「なっ……っ！ 荀都尉も春蘭もなぜ躊躇いもなく、それを口にて
きるというの……っ！」

衝撃のあまりに背景に稲光がちらついて見える孟徳殿。
額を押さえてるってことは、既に頭痛持ちなのか？

妙才殿はお椀に鼻を近づけ、真剣に匂いを嗅ぎながら、
口に入れるべきか唸り続けている始末。……ちよつと面白い。

「っ
♪ ああ、日本人で良かった……お代わりある？」

「夏蘭の造った味噌風味の雑煮は、相変わらず美味しいわ。母として鼻が高い高い」夏蘭、お代わりっ！」

「どうぞ、紗耶、義母上。喜んでもらえて何よりですよ」

紗耶や義母上はご満足の様子で、造った俺も嬉しくなる。

屈託の無い笑顔を見せてくれる二人は、どこか似ている気がする。

「匂いは美味そうだなー。よしっ、頂くぜっ！」

「どうです、長鸞（文醜）殿」

「うっ、うんめーっ！ 斗詩も姫も食って……あ」

「……どうかなさいましたか？」

うまいって言うてるから、味のことじゃないよな？

「姫のこと完全に忘れてた……」

……あ。

泥水（後書き）

単位は三国時代当時の一斤¹¹223グラム程度、としています。

手作り味噌とか、文章にするとあっさりですが、こんな簡単に作れるわけは無いです。醤油にしてもそう。

近々、自分でやってみようとは思っているんですけどね。

麹はさすがに無理ぽ。

通常の三倍（前書き）

閑話回になつてもーた……。

まったく話が進まなかったでござるよ。

通常の三倍

おーっほっほ姫のことを完全に失念していた俺達。

……まあ、この世界での袁紹（字を本初）のことなんだがさ。

いや、気を失っていた清臣（顔良）殿は別として、

長鸞（文醜）殿まで完全に忘れ去っているってどうなんだよ。

「斗詩のあられもない姿や、うまいもん食ってたら、
姫のことを忘れちまうのも仕方ないよな！　ハハハっ！」

「いやそのりくつはおかしい」

思わず耳のない猫型ロボットのノリで反射的に突っ込んでしまった
じゃないか。

清臣殿は完全に涙目になっているし。苦勞してるんだなあ……。

「公達さんの言うとおりだよお！　一刻あまりも放置したままなん
て、絶対にまずいよ！」

「……まったく。麗羽……袁本初のことだけど、
荀都尉が急病の知らせが来た為、後日再度席を設ける……と伝えて
出てきたから大丈夫よ。
貴方の威光とやらにやられたのでしようと言っておいたから、勝手に
納得するでしょうし」

助け舟とばかりに、鼻で笑いながら『威光』などと言う孟徳さんに、
義母上、清臣殿、長鸞殿が口々に謝辞の言葉を返していく。
その中でも、清臣殿の弾けるような笑顔が印象的である。

ただ、孟徳さん、欲情を刺激されたとはいえ、即座に舌なめずりは良くないと思うよ？

長鸞さんが本能的に威嚇し始めかねないから。

それにしてもさ、誰も否定しないんだね。

既にこの時期から威光（笑）と思われることについて。

視線で紗耶や妙才殿に問いかけてみるが、苦笑いしか返ってこないということは、

つまりはそういうことなんだろうな……。

「荀公達、今回は貸しにしておくわ。

どんな形で返してもらえるのか、楽しみにさせてもらおうわよ？」

「……善処しますよ、孟徳殿」

トイチなみの金利で返済を求められそうで嫌過ぎるっ！

ほんまにええ顔してるわ、このサドめっ！

「また失礼なことを考えているわね？」

「H A H A H A、滅相もない！」

「ひーちゃん、それじゃ胡散臭い外国の人の笑い方だよ……はむはむ」

紗耶よ、フォローしてくれてありがとう。だが、雑煮を食べながらなのは行儀が悪いぞ？

美味しいんだから仕方ないって満面の笑みで言われると、

俺としては全力で肯定する以外の選択肢はあり得ないわけだが。

おお。無言でお椀をかつ食らう勢いの、長鸞殿の食べっぷりも気持ちいいな。

あれだけ夢中で食べてもらえると、作り甲斐があるってもんだ。はい、おかわりですね、どうぞどうぞ。

「とても美味しい汁湯だし、すごくあつたまるよお……公達さん、ありがとうございます」

清臣殿は少しぐらい報われればいいと思うので、礼を言われるまでもないと思います、はい。
ゆっくりほっこりしていけばいいと思うよ！

「姉者、これは何とも味わい深いものだ……最初こそ見た目に騙されるが、
海藻や魚の風味もしっかりしていて、それに、何か豆のかけらが入っているのか？」

「秋蘭、これはおそらく大豆よ。全くこの見た目に騙された者は哀れというべきね。
しかし、この色合いになるのは何故なのかしら」

一番最後まで口にするのを躊躇っていたというのに、いいドヤ顔だよな、孟徳さ……。

！……おっと、首筋に冷たいものが当たっているぜ……。

「ご名答です、孟徳殿。ですから、その鎌は下ろしましょう」

「懲りずに失礼な考えを持ち続けるからよ？」

「その感応能力……これがニュータイプか……」

「ひーちゃん、華琳様は本当に、常人の通常の三倍の速度で動ける人だよ」

「そこまで出来るのなら、赤くないのが残念すぎる……！」

「夏蘭、流石に角が生えてないから無理だと思うの」

「あれ？ 義母上にこの話題をしたことがありましたっけ」

「今、紗……じゃなくて、春ら……もまずいか、元讓ちゃんに聞いたのよ。」

もう仲良しだもんね」

「うん。仲とお母さんと仲良しですよね」

「やだ、紗耶ちゃん！ 銀花って呼んでくれないと嫌！」

「せめて、銀花さんで」

「やだ」

「銀花……ちゃん？」

「許すーっ！」

「きゃーっ」

孟徳殿との不毛なやり取りの間に、母娘の契りを果たしていた……

だと……。

おまけに明らかに真名の交換まで済んでいるという事実。

義母上が飛び付いてそのまま抱擁に入るわ、完全に私的モードだわ、紗耶もキャッキヤ言ってるし、目の保養になるわぁ。

以前に体型について触れたが、義母上は元々小柄な体形で童顔である。

二人の子供を産んでも、それが殆ど変わってないとなると、姉妹のじゃれあいには見えない辺りが本当に恐ろしい。

「……照れ屋で人見知りの春蘭が、もう打ち解けている……ですって……。」

おまけに荀都尉どのの印象が一気に崩れ落ちて……くうっ」

孟徳殿にも衝撃が走ったようだ。よろめいてる位だからよっぽどだ。妙才殿がすぐに背中を支える辺り、さすが忠臣の鏡。

しかし人見知りってことは、

紗耶の性格が地になっているから、本来の春蘭さんの性格からは程遠いわけか。

通常の三倍（後書き）

銀花さんはもともと幼い体型に加えて、夏蘭くんから日々若さを吸い上げているので、

紗耶（春蘭）との睦まじいやり取りも眼福と化すのです。

なにそれこわい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8348z/>

荀公達の憂鬱～真・恋姫†無双

2012年1月13日15時45分発行